

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第749号 平成26年6月9日

## お接待

私が親しくして頂いている方に淡川邦良さんとおっしゃる方がいます。彼は、1946年（昭和21年）生まれですから、私と同年齢という事になります。

淡川氏は大学卒業後北海道テレビ放送（HTB）に入社。その後一貫して営業関連の仕事をされ、2010年6月常務取締役を最後に退任されています。その彼が先般、「僕の歩き遍路」という1冊の本を上梓しました。

この「僕の歩き遍路」という本は、文字通り四国88カ所を40日間かけて巡った遍路旅の記録です。

淡川氏が何故四国を歩こうとしたのか、心の深層は分かりませんが、「ロングウォーク」への憧れだけで40日間もの四国遍路の旅に出たとは思えません。おそらく、彼が長年勤め上げた会社からのリタイアがきっかけの一つだったのではと感じています。

私も、人生の一区切りが来たら四国を遍路して、人生を長く生きて来た間に染み付いた垢を一度綺麗に洗い流したいと思っていますが、だいたい「人生の一区切りが来たら」という発想自体が甘い訳で、なかなか実行できそうにありません。それだけに、四国88カ所を歩き通した淡川氏に感嘆すると共に、羨ましく思っています。

淡川氏は「僕の歩き遍路」の中で、次の様なエピソードを載せています。

それは、歩き始めて4日目の事でした。その日は朝から雨が降りしきり、淡川氏はその雨に打たれながら歩いていた時の事です。

郊外の片道3車線の広い通りに出た時、向かって来た自動車からピンク色のカーディガンを着た少女が下りて来て、雨の中にぽつんと立ち止まった。何か気になりながらも通り過ぎようとする、彼女は突然「お接待です。お気をつけて」と飴玉の入った小さな紙袋を渡してくれ、あっという間に車内に滑り込んでしまった。

初めてのお接待はこうして全く意外な形でやって来た。僕は動き始めた車の運転席のお母さんに向かって、直立不動で「ありがとうございました。」と、ただ大声で返すのが精一杯だった。向かい風の雨が顔にあたり、涙が止まらなかった。

淡川氏が雨に打たれながら流した滂沱の涙は、私にも分かる気がします。お接待という無償の愛の形が、雨と共に体の奥深くにある澱を洗い流してくれている、そ

んな心境だったのではないかと思います。

四国のお接待は、大変有名です。遍路道を旅される皆さんにとって、お接待程心温まる、有り難いものはないでしょう。

四国遍路の旅は今も昔も過酷です。それでも四国88カ所を遍路する人々は、それぞれ心の中に何かを抱えながら歩いているのであり、決して物見遊山の旅人ではありません。それだけに、地元の人々は修行者を見る様な思いでお遍路さんを見ているのではないのでしょうか。だから、地元の方々がお遍路さんをお接待するのは、旅行者に対するサービスといった類のものではなく、修行者に対する布施なのだと思います。

お遍路さんが被る菅笠には「同行二人」という言葉が書かれています。この「同行二人」というのは、自分は一人ではない、必ず傍には弘法大師がいて、守ってくれているという意味です。つまり、遍路旅は、弘法大師との二人旅なのです。ですから、地元の方々にとって、お接待は弘法大師への布施という事でもあるのだと思います。布施という無償の行為は、我が身に代わって修行してくれる感謝の気持ちの表れでもあります。

お接待は、それを受ける者はもとより、する者にとっても、人が生きて行く道は常に「同行二人」である事を気付かせてくれるのだと思います。地元の方々は、お遍路さんに対するお接待という布施を通して、お遍路さんと共に四国88カ所を巡っているのではないかと、私には感じられるのです。(塾頭：吉田 洋一)